

インフィニット・ストラトス～再始動するもう1人の天災

ネヘモス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

やりたいことしかできない病―自称「YD」の男、鑑純一郎。彼がISを動かしたことで世間に大きな波紋が広がる。

6／18にタグを追加しました

6／24にタグを追加、及びタイトルを変更しました

# 目次

日常の崩壊は突然に	1
二人の天災	5
ツイン・ウロボロス	9
IS 基礎担当教師・鑑純一郎	13
フルメタル・メイデン	17
赤騎士	22

## 日常の崩壊は突然に

IS—インフィニット・ストラトス。宇宙進出を目的として作られたパワードスーツにして、無限の空へ飛び立つ翼。だが、これを兵器として転用しようとする輩がいた。ところが、ISには致命的な欠陥があった。

「ISは女性にしか動かせない」—この考えが歪んで今この世の中は女尊男卑という風潮が出来上がっていた。

ところが、それを覆す事件が起こる。男性のIS適合者が現れたのである。彼の名は織斑一夏、「ブリュンヒルデ」織斑千冬の実弟である。これにより女尊男卑の風潮は無くなると思われた。だが、それでも世の中は変わらなかった。

そのような事が立て続けに起こり、世間は篠ノ之束と並ぶ1人の男の「天災」の存在を忘れ去っていった。

秋葉原のとあるレンタルビデオショップにて、

「チクシヨ—！栗林みなみの握手会の整理券、間に合わなかったあああ!!」

世間一般では下らない理由で絶望していた1人の男がいた。赤い髪に白衣を着たその男—鑑純一郎は眼鏡越しでもハッキリ分かるように血涙を流していた。

「クソッ！今日はヤケだ、マッ○のフライドポテトLサイズ10個食ってやる！」

そう叫ぶと店を出て男は周囲を警戒しながらマッ○に向かった。何故周囲を警戒する必要があるのかというと、

「今度こそ逃がさないわよ…、鑑先生（兄い）」

金髪ロングの自分の妹である鑑純音と変則ツインテールこと桃園マキナが自分を探しているためである。もし捕まればまた面白くもない教師に逆戻り、そんなのはごめんである。

そして、監視の目をかい潜りマツ〇に到着した。すぐに店員に向かってポテトのLサイズを10個頼むことにしようと思っていた時、『ほら、新人！注文取りに行く！』

『え？でも、僕…』

『女の私に楯突こうっていうのか？いい度胸してるじゃん』  
『…分かりました』

純一郎はこのやり取りに慣れていた。女が嫌がることは男に全てやらせる、彼はそんな世の中の風潮が気に入らなかつた。そして天を仰いで今はどこにいるかも分からない自分の友人に尋ねた。

ーこれが、お前の見たかつた世界なのか、と。

程なくして男性店員が出てきて注文を取った。店員が少し引き気味になりながらも注文通りにポテトの大群がやってきて勘定を済ませた。そして、適当な席に着きポテトを食べようとしたその時、

「全員動くな!!」

高らかな女性の声が響く。それだけで店内にいた者の殆どが動かなくなつた。まあ、その女性がISー日本の量産機・打鉄を纏っているから当然の反応である。男は尚更動く事が出来なくなつた。

ただ一人、ポテトを貪り食っていた純一郎を除いては。

「貴様、動くなど言ってるのが聞こえないのか!?それとも、ISも動かさない男の分際で女に楯突こうってのか!？」

「飯くらい食わせろよ。それによ…、俺は今虫の居所が悪いんだ。後で後悔するのはお前だぞ?」

この発言がISを纏つた女性を逆上させる。女性は量子化していた打鉄のブレードを展開し、場が騒然とする。女性はその鋭い切っ先を純一郎の喉元に向ける。

「最終通告よ…。動くな」

「断る」

振り向いた純一郎はポテトを一本啜えながら不敵に笑っていた。女性の最後の理性が切れた。

「なら死ぬ!!」

純一郎にブレードが振り下ろされる。観衆が見たくないと目を

瞑った。

ガキン

肉を斬るような嫌な音がしない代わりに金属同士がぶつかりあったような音がした。観衆が恐る恐る目を開けると信じられない光景が広がっていた。

「な、なんで…？今世界でISを動かせる男は織斑一夏だけの筈なのに…」

だが、認めざるを得ないだろう。何せ、

西洋の鎧の様な装甲に身を包み、二刀の刃で打鉄のブレードを止めた純一郎がそこにいるのだから。

それを見た観衆の1人がこんなことを呟いた。

「そう言えば、篠ノ之博士に並ぶ男の天才天災がいるって話を聞いたことがある」

その観衆が言うには、その男は若干17歳の若さで「どこでもドア開発論」なるものを世界的な科学誌「ネイチャー」に提出。それにより篠ノ之東が出てくるまで「天才天災」と呼ばれた男がいると。

「それが、何の関係があるって言うんだ!!」

「分からねえヤツだなあ、お前」

刃と刃が火花を散らす。

「一つ良いことを教えてやろう。ISのコアは誰が作ったものでしょう?」

「そんなの、篠ノ之東博士に決まってるだろう!」

ISのコアを作り出したのは篠ノ之東その人だ。だが、彼女はISが兵器の転用をされていることを知るとコアの数を467個のみに絞った。

「そうか、なら聞くけどよ? ISそのものを作った人間が誰かって、知ってるか?」

静寂、それがその場を支配した。

「それは…!?!」

女性は答えようとして口籠る。確かにISのコアは篠ノ之東しか

作れない代物だろう。だが、それを作った人物とは誰なのか、実際のところは誰も知らない。

「答えられるはずないよな？何せこれは、女性権利団体によって闇に葬られた事実だもんな。まあ、そろそろネタバレしてもいいか？」

刹那、女性のISが強制的に解除された。観衆も女性も一瞬何が起きたか分からなかった。

「貴様！一体何をした!?!」

「なーに、単純な話だ。お前と顰迫り合いしていた間にISのコアを一時的に動かなくするウイルスを打ち込んだだけだ」

場がまた哑然となる。ISを解除すると丁度そこに純音とマキナが現れる。

「見つけましたよ、鑑先生。ほら銀杏に戻るわよ！」

「スズ、変則ツインテール、すまん。どうやら、俺は銀杏には戻れないっぽい」

マキナは何を言ってるのか分からなかったが、純音は事の重大さに気がついた。

「兄い！IS使ったわね!?!全く、いくら自分がISの設計者だからって、やっていいことと悪い事があるでしょう!」

「スズ!?!今それをここで言うな!」

すると、観衆の1人が納得したように立ち上がり純一郎を指差した。

「やっぱりそうか!その『天才』はオタクって噂が流れてたけど、『鑑』そして『銀杏』、全部繋がった!」

そして、声高々に宣言する。

「あの人の名は『鑑純一郎』。篠ノ之束に並ぶとされる『天才』だ!!」

純一郎はこの日の自分の行いを悔いた。そして、自分の日常が崩壊するのをひしひしと感じさせられた。

## 二人の天災

先日の秋葉原IS襲撃事件より1週間が経った。鑑家周辺は報道陣や研究各所の関係者で埋め尽くされていた。

「ねえ、兄い。本当にIS学園に行かなくていいの?」

「やだね。何せ俺は『YD』だからな」

YDー純一郎曰く「やりたいことしかできない病」。純音はこの兄の言い訳にいつも振り回されていた。それは純一郎が銀杏の教師になってからも続いた。

だが、そのお陰かどうかは分からないが、多くの生徒が彼に救われた。元生徒会長・桃園マキナからバイトをやっていただけで退学に追い込まれそうになった式島切子、野球が出来なくなり、不良街道真つしぐらだった七海征十郎、自分の声に自信を無くし1年前まではメールで会話をしていた千波花音、漫画を描きたい一心で学校に来なかったが学校で描いてもいいと言われて学校に始めた天上院騎咲、中学の頃のトラウマのせいで外にすら出なくなっていた荒木光太郎と挙げればキリがない。でも、そのお陰で彼らは各々の進むべき道を見けることができた。

だから、言っても無駄だろう。この兄は最期の瞬間まで「YD」を突き通すだろう。重音さんがそうしたように。

「でも、このままだとうかうか外に出られねえなあ…。仕方ない」

しづしづと言わんばかりに携帯を取り出す純一郎。ダイヤルを押してコールしたのは、

『もすもすひねもすー?みんなのアイドル束さんだよー!』

「相変わらずだな、束」

『その声はかがみんかなー?どう?その後「ツイン・ウロボロス」の調子は?』

「抜かせ。誰がISの基本技術確立したと思ってる?」

『かがみんなに決まってるじゃーん。尤も、バカな女共はそれを葬り去った訳だけど』



「兄い？きつきから誰と話してるの？」

純音が話について行けてないらしい。

「悪い、スズ。少し席外しててくれ。」

純音は何だか納得いかないと言うような顔をして部屋から出て行った。

『じゃあ、邪魔者も居なくなったわけだし、本題に入る？』

「そうだな。じゃあ束、頼まれてくれるか？」

純一郎は束にマスコミの収束を頼むことにした。…当然条件付きで。

『じゃあやつとくからねー！バイバーイ』

そう言い残すと束は電話を切った。後は、変則ツインテール オブション付き桃園マキナと柊 暦に説明するだけだが…と。純一郎は意を決して外に出ることを決意した。

当然外に出た瞬間に質問の雨あられ。そして、どの質問も無視して純一郎は話すことにした。女性権利団体に葬られた真実を。そうすれば、しばらくはあいつらも下手には動けないだろうし、何より面白そうだったからである。

「マスコミの諸君！聞いて驚け、ISのコアを作ったのは他ならぬ『篠ノ之束』だが、ISの設計の根幹を作り上げたのはこの俺、鑑純一郎だ!!」

ざわつき始めるマスコミその他諸々。そこに更なる拍車をかける。「なら見せてやる！この俺の『専用機』を！」

白衣の右袖から赤いガントレットを見せつけるように構え、あいぼう専用機の名前を呼ぶ。

「行くぜ！『ツイン・ウロボロス』!!」

眩い粒子が彼の体を包み込む。そして光が収束した時、それは大空へ飛び立った。上空を舞ったそれは元の場所に戻るとそこには西洋風の赤い甲冑の様な装甲を持つISを纏った純一郎の姿があった。その姿となって彼は高々に宣言する。

「俺、鑑純一郎は来週付けでIS学園に生徒として入学する！そして、そこを出るまではどこの国にも属さない！さて、俺が言いたいことは

これだけだが、マスコミ諸君。君たちは早々に立ち去ることをオススメする。じゃないと…」

ISを解除した後眼鏡を外して目を細めて一言。

「お前たちの会社のコンピュータをハッキングして二度と使えないようにする」

その鋭い眼光にやられたのかマスコミ各社は虎の子を散らす様に家の前から去っていった。

『ーと、言うわけだから！来週からかがみんの事よろしくねー！』

「ちよつと待て！話が見えん！」

東は千冬がどうこう言う前に電話を切った。千冬はかなり混乱していた。

まず、ISを作ったのが篠ノ之束ではなかったという事実、その人ががもう一人の適合者という事実、そして最も気になったのが…第1世代のISで第2世代の打鉄を打ち負かしたという事実だった。だが、あの「ツイン・ウロボロス」という機体は性能的には第3世代に匹敵すると束は言っていた。

「鑑純一郎、束の所為で世界から忘れられていた『天災』か……」

その頃、某国某所にて。

「ねえ、オータム聞いた？」

「2番目の男性IS適合者のことか？」

金髪の美しい女性がガラの悪そうな女性と話をしていた。話題は他にもない、「ISの根幹の設計者」にして「第2の男性適合者」の純一郎の事だった。

「正直、あれが言ってることは本当なのか？」

オータムと呼ばれた女性はどこで手に入れたか分からない純一郎の経歴を眺めながら呟いた。

鑑純一郎

頭脳明晰だが体力に難あり

7つ下の妹がいる

若干17歳でイギリスの科学誌「ネイチャー」に載る論文を提出する

以降7年間消息不明（本人は家でアニメブログの更新をしてたと主張）

24歳で東神鳴高等学校の物理の非常勤講師として一ヶ月勤務、その後無職に戻る

と、思われたがそこを柘曆に拾われて銀杏学園の高等部2年3組の担任となる。その後色々な生徒を更生させて、一部の生徒からはアルティメットティーチャー究極の教師として尊敬の念を向けられている。

「あっ!?!」

オータムが突然の大声を上げた。

「どうしたの、オータム?」

「確か、ISが出たのって…!」

オータムの記憶が正しいならおおよそ7〜8年前の話である。そして、7年間空白になっている純一郎の経歴。

「これで決まりね。多分あの人<sup>が</sup>IS学園に入る頃にはクラス代表対抗戦が有るはず。そこにゴーレムを放ってみましよう」

水面下で恐ろしい計画が着々と進んでいることをこの時誰も知らなかった。

## ツイン・ウロボロス

純一郎がIS学園に入学する宣言をした2日後のこと。鑑家の玄関の呼び鈴が鳴った。

「はい、どちら様で…」

応答しに行った純音が言葉を詰まらせた。

「どうした？ ス、ズ……」

玄関先に立っている黒いスーツ姿で切れ目の女性。純一郎が、否、世界中の誰もが知っている人物がそこに立っていた。

「顔を合わせるのは初めてか。束から話は聞いてるだろう。IS学園教師の織斑千冬だ」

泣く子も黙る、ブリュンヒルデ世界最強がそこにいた。

千冬を鑑家上げると、純音が3人分のコーヒーを出す。

「あの、お口に合えばいいのですが…」

「お気遣いありがとう。いただくとしよう」

そう言うお机に置かれたコーヒーに口をつける千冬。そして、純一郎が本題に入ろうと切り出した。

「で？ 何の用事でここに来たんですか、ブリュンヒルデ様？」

「お前が私の生徒なら容赦なく引つ叩いてるだろうが、それは置いて。鑑、お前の専用機の性能テストをさせて貰いたい」

「それは建前で本音は？」

「お前の実力のほどを知りたいので私と模擬戦をしてくれ」

流れに乗せられてか本音が出てしまった千冬は純一郎をキツと睨んだ。下手するとあの終有栖ロールパンよりも怖いかもしれない。

「別に構わないが、それ俺がIS学園に入学してからでもいいんじゃないか？」

「お前のニュースを見た私の担当してるクラスがお前の専用機と実力を早く見たいとうるさくてな、すまない」

ぺこりと頭を下げる千冬に動揺する純音。すると、純一郎がとんでもない爆弾を投下する。

「その模擬戦、やってもいいぜ。ただし、相手はあんたにやってもらう

がな」

「ちよつと!?!兄い、本気?!相手は世界最強のブリュンヒルデなんだよ!?!」

純音が言うのも理解できる。織斑千冬を相手にするというのは、世界を敵に回すと言っても過言ではない。それに、この事が知れたら、それこそ女性権利団体が黙っていないだろう。

「ほう?世界最強と言われてるこの私に勝負を挑むとは、その根性だけは認めてやろう。少なくとも、弟よりも肝が座ってて安心した」

「はっ!お前が『世界最強のブリュンヒルデ』なら、こっちは『忘れ去られた天災』だぜ?こうでもしないと面白くないだろう?」

千冬は知らないだろうが、純一郎は面白くないことには全然やる気を出さない性格だ。それが彼の最大の欠点であり、同時に最強の武器となることを妹の純音は知っている。

「では明日、IS学園のアリーナで模擬戦を行う。送迎はするから安心しろ」

「ご丁寧にどうも。では…次会うときは戦場で」

ゾクリ

千冬は久し振りに寒気がした。純一郎から発せられる謎のプレッシャー、これが原因だと純一郎の眼を見てわかった。

純一郎の眼は、一言で言えば濁りがなかった。一点の曇りも見えない、それでいて鋭い眼光。それが彼女の闘争心をより一層引き立てた。

「ではまたな。いい試合になる事を期待するぞ、鑑」

そう言い残すと千冬はコーヒーを飲み干して学園に帰っていった。

翌日、IS学園アリーナの観客席。表向きでは「世界初の男性適合者」の織斑一夏はとてもソワソワしていた。自分以外にも男でISを動かせる人間がいると言うだけで自室で喜んだほどだった。そんな2人目の男性適合者を見てみたい、それが今の一夏の頭を支配していた。

ところがそれとは裏腹に、女性陣は純一郎の言ったことが信じられないと思ひ、アリーナに来ていた。特に東の実妹である箒は現実を受け入れられずにいた、いや、受け入れたくなかった。そして片方のピットからアリーナに出てきた人物を見て会場は騒然とする。

「織斑先生!？」

そこに立っているのは打鉄を纏った織斑千冬その人だったからである。そして、反対側のピットから赤いISが姿を現す。打鉄とは打って変わって西洋風の赤い装甲で、腰には2本のブレードが装備されていた。一夏はその姿にある人物の面影を重ねた。

『神速の赤騎士 ザ・ファースト』と同じ…?』

自身がこっそりプレイしている「ウロボロスオンライン」で、最強と謳われるプレイヤー「神速の赤騎士 ザ・ファースト」によく似ていたためである。気のせいだと思いたかったが、試合開始のブザーが鳴ると同時にそれが現実だと思ひ知ることになる。

試合開始のブザーが鳴るとほぼ同時に千冬は瞬間<sup>イグニッションファースト</sup>加速で牽制をかけた。いや、かけたと思われた。：ハイパーセンサーにWARNINGと表示されるまでは。

「シールドエネルギー全変換、ワンオフアビリティ単一仕様能力発動!!」

純一郎は瞬時加速で詰め寄った千冬の攻撃を紙一重で躲し、更に上空へと飛び上がる。そして、2本のブレードを引き抜き中段に構える。

すると、上空に幾何学的な紋様が幾つも浮かび上がり、そこから無数の剣が千冬に向かって放たれた。

「凌げるもんなら凌いでみろ! 『バレットソードインフィニティ!!』」  
ツイン・ウロボロスの単一仕様能力「バレットソードインフィニティ」。質量保存の法則を完全に無視したように見えるところでもない大技。代償として「零落白夜」同様シールドエネルギーを消耗するが、これは一騎打ちでも、集団戦でも使えるある種最強の能力である。

表立って出てきてる武器は2本のブレードのみだが、実際はそれ＋スナイパーライフル1丁とバレットソードという特異武装が100本ストレージに入っている。

千冬はこの「バレットソードインフィニティ」に脅威を覚えた。躲しきれない程ではない。だが、凌ぎきれない。なぜかと言うと、この技、剣が被弾する・しないに関わらず、自分を通り過ぎると量子化され、再度襲いかかってくるのだ。そしてジリジリとシールドエネルギーを削られ、

『試合終了！勝者、鑑純一郎!!』

僅差で敗北してしまった。認めざるを得ない、この男の、鑑純一郎の実力を。

「いい模擬戦だった。次は…」

次は負けんと言おうとした矢先、純一郎が倒れこんだ。やはり、一見完璧に見えるこの男にも欠点は存在するようだ。

さて、この程度で倒れられては生徒なぞ務まらない。一体どうしたものかと思ったその時だった。

「私にいい考えがあります」

アリーナに現れた扇子で口を隠してる1人の少女。あの生徒会長かと思つたが、白いスーツに身を包み、銀色の髪色をしていたので違つと確信した。

「鑑純一郎。彼には『IS基礎』の担当教師になって貰えばいいのです」

「なるほど、その手があつたか。恩にきる、柊暦」

「いえいえ、それもこの国を面白くするためですから」

そう言い残すと柊暦は扇子を展開すると不敵な笑みを浮かべてその場を立ち去つた。

## IS基礎担当教師・鑑純一郎

鑑純一郎のIS学園行き宣言をした後、ウロボロスオンライン街中にて。

「え!?!じゃあファースト、IS学園に行くの!?!」

「ああ、当分インできないと思うから1人でクエストこなしていけるだろ?」

街中で話している赤い鎧を纏った騎士風の男と黒髪で頭の上のりボンが特徴的なシスターが話していた。片方は「神速の赤騎士」ザ・ファーストもとい、鑑純一郎。そして、もう片方は「鉄壁のシスター」ルーチエもとい、元不登校児の荒木光太郎である。

「でも知らなかった。ファーストがIS作った張本人だったのか。」

今の今まで女性権利団体によって隠蔽されてきた真実。ISの根幹を作ったのは男であるという事実が報道されて、世の中は騒然としている。

「ふむ…、ルーチエ。ちょっとリアルで会えないか?」

「え?別に構いませんけど…?」

「俺が表立って動くんだ。この際、もっと面白いことをやろうじゃないか…」

ファーストは不敵な笑みを浮かべた。

純一郎がIS学園に行く当日。純音はマキナと用事が有るとかで自分より先に家を出た。純一郎は自分の荷物を纏めると暫く帰れないであろう我が家に別れを告げた。そしてIS学園の迎えの車が来る。純一郎が車に乗り込むと、予想外の人物が3名いることに気が付いた。

「スズ?何でお前と変則ツインテール、それにオプション付きまでいるんだ?」

「私は兄いを監視するため、と言いたところだけど、IS設計者の妹



だから」

「私はあなたを監視するためよ。鑑先生、くれぐれもIS学園で『YDアウト』になるのだけはやめてよね」

「私の叔母がIS学園の理事の1人なので。鑑先生のサポートができないかと」

理由は違えどみんな自分のためにIS学園に行くということがわかった。ちなみに、純音、マキナ、暦は3人とも1年4組に編入するということだった。∴自分の担当クラスが何となく分かった気がした。

「オプシオン付き、まさか俺、また担任やらされるのか?」

「ええ、これからよろしく願います。鑑先生」

自分の運命を初めて呪った。というか、あいつに出会ったせいであろうなっただろうと今更思っていたりした。

純一郎がIS学園に向かっている頃、1年1組に転入生がやって来た。その中の唯一の男子・織斑一夏は先程の転校生の中国代表候補生の事があった為、特に問題視はしていなかった。

「では、SHRの前に転入生を紹介する。入れ」

千冬の指示で入ってきた1人の少女。黒髪を肩まで伸ばし、頭に細いリボンを結んでいて、カラフルなハイソックスを履いている少女だった。

「えつと∴、荒木光ひかるです。突然IS学園に編入することになりました。よろしく願います」

1組の面々は違和感こそ感ずれど、いつものようにSHRを終えた。一夏が1時間目を確認すると、そこには「IS基礎」の文字。一夏は正直、この授業が苦手である。ISのコアの数とか、

パッシング・イナーシヤル・キャンセラ  
P I C の原理などなど、兎に角覚えるのが大の苦手であつた。すると、

「織斑君。ちよつといいですか?」

話しかけてきたのは1組の副担任の山田麻耶先生。胸の大きさを

除けば中学生で通るかもしれない彼女からこんな言葉が飛んできた。

「今日から織斑君には荒木さんと同室になって貰います」

「は？ちよつと待つてください！知人の箒と同室ってだけでこっちは疲れるのに見ず知らずの女子と一緒になってくれと？」

いや、複雑な心情ではあるものの冗談じゃない。第一、自分はこれでも男だ。箒が隣に寝てるだけで寝れなくなるのに、余計に寝不足になれと申すか、あの姉は。

「しばらく顔を合わせることがないだけで清々する。おおお前の様な未熟者と同じ部屋なんて、しし死んでもお断りだからな」

ブルータス  
箒、お前もか。どうやら俺は天から見放されてるらしい。そして、話題に上がった荒木の方を見る。そして、ある事に気がつく。

『鉄壁のシスター ルーチェ』？」

まさかなと思いはするが。と、考えた所で

「うーす…」

やる気の無さそうな白衣を着た男性、先日千冬をIS勝負で倒した張本人が教壇に立った。

「えーつと、今日からIS基礎を教えます、鑑純一郎です」

「先生、質問です」

突然クラスメートの1人が手を挙げる。確か、相川さんだったかな？

「鑑先生がISの根幹を作ったって本当ですか？」

核心を突く質問を投げかける。すると、予想外の返事が返ってくる。

「あー、お前ら『白騎士事件』のことは知ってるよな？あの謎のIS『白騎士』のベースになってるのは俺の『ツイン・ウロボロス』だ」

白騎士事件、日本に向けて1000を超えるミサイルが世界中から発射され、それを白騎士という謎のISが全て撃ち落としたというISが世間に認知されるようになった事件である。

「だったら、鑑先生は誰が白騎士なのかをご存じなんですか？」

「…さあ？」

何だ？今の間は。知ってるな、知ってて黙ってるクチだな、騙され

ないぞ俺は。

「そうだな、このクラスには専用機持ちが2名いるのか。なら、白式のスペックを教えよう」

「え!? そんなこと出来るんですか!？」

「倉持のときのISだろ? データ盗むのくらい簡単だ」

この先生は普通の人なら絶対出来ないことをやってのけてるから怖い。千冬姉と違う意味で。あの勝負の「バレットソードインフィニティ」しかり、「どこでもドア開発理論」しかり、とんでもない人だとは思う。ところが、マスコミがいくら調べようとしても鑑先生の情報は得られないという。何でも、その情報を得たいならアメリカのペンタゴンを破るくらいの実力が無いと無理だそうだ。

「そうだな、百聞は一見に如かずだ。アリーナの使用許可は下りてるから、全員、アリーナに移動しろー」

面倒くさそうに立ち上がるクラスメイト達。座学で外に出るなんて初めてだから当然ではあるのだが。

そうこうしてる内にアリーナに着いた。

「織斑、白式を展開してみろ」

言われるがまま白式を展開する一夏。すると、

「今から軽い模擬戦を行ってもらおう。相手は…荒木だ」

「ちよつと待ってください!? セシリアなら兎も角、訓練機の打鉄だと圧倒的に不利ですよ!？」

「安心しろ、荒木は専用機持ちだ」

一拍遅れて

『ええええええ!!?』

1組の絶叫がアリーナに響いた。

## フルメタル・メイデン

荒木光が専用機持ち。この事実は1年1組の生徒全員の度肝を抜いた。そう、2人の生徒を除けば。

「それはどういう事(だ)(ですの)!!」

1人は黒髪の長いポニーテールの少女、篠ノ之束の実妹である篠ノ之箒。もう1人は金髪の縦ロールの少女、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットである。

「男でISが使える一夏さんや鑑先生は分かります!ですが、今回転校してきた一介の学生が専用機を持つてるとはどうなってるのですか!?!」

セシリアがこう言うのも尤もだ。だが、荒木には面白いシナリオを描いてもらう様に頼んでるんだ、抜かりは無い。

「あー、じゃあバラすけど、こいつは俺のISのデータ取り用の人間、言わばそのシスコンと同じ『モルモット』だよ。」

「貴様!一夏を侮辱するか!」

箒がどこからか取り出した木刀を純一郎に振りかざす。だが、  
「っ!?!」

「まだまだだな、ポニーテール。まだうちの妹や束が速いぞ。」

紙一重で躲される。そりやそうだ。昨年1年間、純一郎はマキナや純音から木刀なりバットなりを掻い潜って生きてきて今ここに居る。あの程度、避けられなかつたら何度死んでるか分からないのだ。

「箒!もういい。荒木、ISを展開してくれ、授業が進まない。」

それを止めにかかったのはシスコンの一夏だった。ちなみに何故一夏が純一郎からシスコン呼ばわりになってるかと言うと…過去に繋がるので今は言わないでおこう。(メメタア

「分かりました。行くよ、『フルメタル・メイデン』!」

彼女の耳に付いていたアクセサリが光輝く。そして、光の粒子が光の全身を包み込み、それは顕現した。純一郎と光を除く1組生徒全員が唾然となる。

そのISには、装甲らしい装甲が一つも見当たらなかったので溢

れ。何せ見た目は青い修道服を着たシスターのそれなのだから。

「えつと、よろしくお願いします…」

「お、おう…」

一夏は雪片を、光は量子化していた自分の得物を構える。光の得物は少し長めのメイス、早い話が棍である。

「では、両者始め！」

先に動いたのは一夏だった。瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>加速をかけて相手の不意をつき、雪片で光を捉えた。…かのように見えた。

光が、忽然と消えていた。雪片を構えながら警戒する。だが、「があ!？」

不意に頭に鈍痛が走る。そして、ハイパーセンサーを見ると自分のシールドエネルギーが減ったのに気が付いた。背後に立っている光。彼女がこう切り出した。

「今のあなたの実力はこんなものですか？それじゃあ私は本気を出せませんね」

流石にこの一言には、逆上せざるを得なかった。

「なら、意地でも本気にさせるまで!!」

一夏は白式の単一仕様能力<sup>ワンオフアビリティ</sup>「零落白夜」を発動する。自分のシールドエネルギーと引き換えに、強力無比な一撃を与えるエネルギーの刃を光に向ける。

「うわあ、すごい」

小さく称賛の声を上げた光。だが、そうゆっくりもしてられない。

「千冬姉の誇りを、守る！」

エネルギーの刃が光を捉える。そして、そのまま横一文字に一閃した。勝った、そう思い油断した。

「一夏！避ける！」

「えっ?」

唐突に響いた箒の声で我に帰る。だが、時すでに遅し。目の前の光は、またもや消えていた。すると、

「やっと本気を見せたね。なら、僕も。『単一仕様能力』発動」

光のISのシールドエネルギーが棍の先端に集まる。これを見る

とあれは棍ではなく杖に見えなくもない。そして、一夏の視界が真っ青に染まる。一夏はある事に気がつく。

(これは、結界!?)

一般人がそんな解答を聞けばすぐさま彼を笑うだろう。だが、彼は目の前で起きているそれを結界と認識せざるを得なかった。何せ、ISのアシストも零落白夜も例外なく無力化されていたのだから。ISはアシスト無しで動くともものすごく重い、だから動こうにも動けないのである。

「…先生、俺の負けです」

一夏は静かに降り立つと光の方に黄色い声援が上がる。

「荒木さん凄ーい！最後のあれ、何なの!?!」

「あれはフルメタル・メイデンの単一仕様能力『妖精結界』。相手のISの単一仕様能力や動きを制限する能力なんだ。まあ、この能力の副作用で僕はこの杖『フェアリーロード』しか武器を格納できないんだけど」

「でもあれ可愛いねー！いいなー、私も専用機持ちになりたいよー。あ、その時には鑑先生に作ってもらおう」

「じゃあこれから励めよ?ここからが、お前らのステージなんだからな!」

こうしてこの日、1年1組の生徒全員が同じ目標を持つようになった。当然、箒やセシリアも例外では無かった。

そして、学生寮1025室前。箒と入れ替わりで一夏のルームメイトが変わった。その人物とは今日転校してきて早々に自分をコテンパンにした張本人の荒木光である。意を決して部屋に入ると、とりあえず誰もいなかった。…そう思っていたら、

「一夏くん?帰ったのかな?」

シャワー室の方から声が聞こえる。そして、なんだかデジジャブを感じる。

ガチャリとドアが開いた瞬間、一夏は自分でも感心するくらい猛ス

ピードで土下座した。

「ゴメン！悪気は無いんだ。ただ偶然荒木がシャワーの時を狙って入ったんじゃないかって「何言ってるの？男の裸を見て興奮するの？」……あ？」

今、信じられない言葉が放たれた気がする。

「この部屋の監視カメラやら何やらは鑑先生の圧力で取り払ってあるから、やっと素に戻るよ」

恐る恐る顔を上げる。目の前の光景に一夏は驚きを隠し得なかった。

そこに立っているのはまぎれもなく「荒木光」である。ここで一夏は違和感を覚えた。

（何も、感じない？）

普通なら女性の裸を見たなら興奮を覚えるのが男と言うものだが、それが何の反応も示さない。もしやと思い、顔を上げると

そこには、女の子顔負けの男の娘が全身にタオルを巻いて佇んでいた。

「二応この姿では始めましてかな？僕は『荒木光太郎』。一夏君と鑑先生に続く第3の男性IS適合者です。ちなみに、僕のことを知ってるのは鑑先生に織斑先生、そしてIS学園上層部くらいだから」

「……………」  
一夏が考え込むように首をかしげる。そして、ある結論に達した。「なあ、あら：光太郎ってさ、『ウロボロスオンライン』ってゲーム知ってる？」

「うん、僕やってるよ？」

「なら、『神速の赤騎士』と『鉄壁のシスター』の事は…？」

「それは鑑先生と僕だね」

あっさりと認めた。自分が、あの「鉄壁のシスター」ルーチェだと。ていつは、

「鑑先生のISって…」

「ウロボロスからとってるんじゃない？ デザインは」

本当に変わった人だやはり思う。だが、これで千冬姉の狙いがわかった。ありがとう、と心の中で呟くと一夏は光太郎とウロボロス談義に明け暮れていた。



## 赤騎士

某国某所―亡国企業の本拠地。フエントムタスク

「おい！確か、明日にゴーレムを向かわせる手はずでいいんだな？」

オータムがスコールに作戦の確認を取っていた。

「ええ。ついでにもし、坊やがゴーレムを倒せないことが分かったらこちらに引き込むのも忘れないでね」

「坊や…ねえ…」

その坊やと最後に会ったのは第二回モンド・グロツソの誘拐事件以来である。あの時確かに織斑一夏を拉致監禁して織斑千冬の連覇を阻止しようと動いた。だが、日本政府はこの事を千冬に伝えなかったらしく、そのまま試合に出ていた。

使えないガキだ、心の中でそう呟いて私はISを展開した。アラクネと呼ばれる蜘蛛のような自身のISは自分でも分かるくらい気味が悪かった。少年は絶望の眼差しで私を見た。うざったい、そう思った私はISで少年を殺した。いや、正確には殺そうとした。

「重音以外に理不尽な死を見るのはもうたくさんなんでね、そろそろ邪魔をしてもいいか？」

その声はボイスチェンジャーによって老若男女区別がつかなかったが、これだけは覚えてる。

一対の双刃が私の攻撃を妨げた。私の邪魔をしたそれはフルフェイスのISだった。全身を赤い装甲で纏い、あの白騎士を彷彿とさせるIS。私は本能でそれから離れた。

「織斑一夏！そこを動くなよ、絶対だからな！」

それは少年に注意を促すと双剣の片方を仕舞う。そして、

「単一仕様能力―Balliet Sword Unlimited  
ワンオフアビリティ

!!

瞬間、私のISが大破した。体制を立て直そうとして、私の喉元に

鈍く光る銀の刃が突きつけられた。

「今すぐ、ここにいるお仲間さんと一緒に立ち去ることを推奨するよ。篠ノ之束を敵に回したくないなら…ね」

「貴様…！一体何者だ！」

私は肺に残つてた空気を全部吐き出す勢いでそれに問うた。

「俺は、世界に忘れられたもう1人の『天災』、そして、女性権利団体によつてその存在をなかった事にされた者」

それだけ言い残すとそれは大空に飛び立った。その後ろ姿はまるで空を飛ぶ火の鳥を見てるかのようだった。

その後、私はスコールと合流してその場を離れた。すると、そのの言つた通りにそこに暮桜を纏つた織斑千冬がやってきた。もし、あの場にいたら私たちはどうなつていたか。想像するのも腹立たしい。

あれから1週間が過ぎたある日。

「くそ！結局あの赤いISに関しての情報は全然掴めない！そもそも、あれは本当にISなのか？」

「存在を忘れ去られた『天災』…ひよつとして、ジュンのことかしらね？」

「は？ジュン？」

スコールが聞き覚えのない名前を口にした。

「オータム、『どこでもドア開発論』って論文聞いたことない？」

それくらいは知っている。一見くだらないようで世界に震撼をもたらした科学誌「ネイチャー」で発表された論文。論文を発表したのは日本の学生、鑑純一郎。…ん？

「おい、スコール。お前の言う『ジュン』ってまさか…!？」

「そのまさかよ。と、言うか私の初恋の相手よ」

啞然とした。まさかスコールにマトモな恋をした時期があつたのかと。

「今失礼なこと考えたわね」

「そんな訳ねえだろ！で？そのジュンのどこが気に入つたのかしら？」

いつもスコールから弄られまくっている。この際だからこつちが

弄ってやろう。だが、その考えは浅はかなものだった。

「ジューンはいつもやる気がなさそうで、いつもアニメばかり見てて、理解に苦しむ存在だったわ。でもね、彼は『自分のやりたい事は必ずやる』という信念を持っていたの。私もそれに惹かれて、テロリストやってるわけ」

なるほど、分からん。深く聞こうとしたが余計に謎を増やしただけの様だった。すると、スコールはおもむろに立ち上がり、こんな事を告げた。

「私が亡国企業を立ちあげる前、ジューンが私に言っていたことがあるの。『この世界は面白くない。今の世の中は束が望んだ理想の世界でも、重音が望んだ架空の世界でもない』って。その時のジューンの顔、とても悲しそうだった。だから私は決めたの。害悪な女性権利団体を取り除くと。全てはジューンが望んでる世界を作るため、その為に亡国企業を立ち上げた」

知らなかった。亡国企業の誕生にそんな裏があったとは。するとそこに

「お姉さん、ここどこ？」

スコールが連れ去ったもう一人の人質が目を覚ました。

「ここは、あなたの新しい家よ、織斑マドカちゃん？」

深夜遅く、IS学園学生寮の純一郎の個室にて

「やっと見つけたぜ」

純一郎は亡国企業が襲撃したと思われる施設の情報を集め、とある人物の捜索をしていた。

その人物の名は「織斑マドカ」、織斑一家の次女であり、一夏の妹であり、自分が助けられなかった人物。あの蜘蛛のようなISと戦闘をした時に禁断の単一仕様能力を使わざるを得なかったので助けることができなかった少女。純一郎はIS学園に来てからずっとマドカの捜索をしていた。

彼女がいないと面白くない。この物語は彼女の存在がいればこそ

面白くなる。そして、彼女は今「亡国企業」、そして「サイレント・ゼ  
フルス」を駆る専用機持ち、ここまであれば先〇クエー〇ーくらい  
余裕のレベルである。後は、

(スコールのヤツがどう動くかだが、恐らくマドカも来るだろうな…)

純一郎が情報収集用のパソコンを仕舞い、別のパソコンにとあるU  
SBメモリを刺す。その内容は

『The Origin of Infinite Stratos  
IS NAME: The Knight of Red  
One of Ability: Ballet Sword  
Unlimited』

全てのISの起源にあたるIS、『赤騎士』の単一仕様能力のデータ  
だった。